

東京に平和祈念館（仮称）を

声なき声を受け継いで

早乙女勝元



みなさんこんにちわ、猛暑のさなか、こちらの会場まで一汗も二汗もかいたのではなからうかと思えます。ご苦労さまです。きょうは空襲被害者救済を求める集いで、さてどんなお話をしようかと今朝まで迷っていましたが、レジュメをお渡ししております。きのう考えたことも、きょうになると、ちょっとこれはまずいな、などと考えているうちに、出かける時間になってしまいました。

ですから、今、頭にあるお話を最初にわかりやすく、レジュメ風に申し上げてまいります。それを心に留めていただきますと、下手な話も後々まで記憶に残していただけるかと思えます。3つに分けて話すことにしました。いずれも私に関わる話ばかりですけれど、まず1番目、「あの日、あのとき」、東京空襲を記録する会発足時のこと、2番目には「ある母の体験記録から」、聞いたことによって生じる責任について、です。3番目、「戦争、空襲を繰り返させないために」、言うべきことを言い続けることについてを、語ろうと思えます。

1. 「東京空襲を記録する会」設立のいきさつ

私が「東京空襲を記録する会」設立を考えましたのは、1970年6月下旬のことです。たまたま私の住んでいる葛飾の町へ歴史家の家永三郎先生が講演におみえになりました。教科書の話です。その聴

衆の一人であった私は、懇談会まで残りまして、「先生、原爆の写真や記事がこれから減っていくだろうというお話でしたが、もちろんどんどん載せてもらいたいけれど、東京空襲の悲劇についても載せてもらいたいのです」と申し上げました。そのとき先生は、「そうそう、東京大空襲は資料らしいものがほとんどないんだよね。今のうちになんとかしなければ……」とおっしゃいました。その言葉が私の心に火をつけたと言っていいと思います。

その夜、眠られぬままに考えているうちに、「東京空襲を記録する会」なるものを作って、民間でできるはずのない大資料集を東京都に作ってもらえないか、ということをおいつきました。そのためには陳情がいいのではないかと。陳情は署名を集めなくてもいいわけですから。ということで、その夜のうちに、美濃部都知事あての陳情書の下書きを書き上げました。そして講演を聴いたばかりの家永先生のところへ。私一人ではなく、たまたま知り合いになった評論家の松浦総三さんと二人で、東京教育大学の家永研究室に行きました。そして、「先生、東京都へ向けての陳情書ですけど、いかがでしょうか」と意見を求めました。

先生も驚いたでしょうね。講演して1週間もたたないうちに、そんな文書をもってやってくる人間がいるとは思わなかったと思います。

それでも、よく読んでくださいます、「この表現はちょっと……、ここはもう少し……」と直していただきまして、第二稿は松浦さんが書きました。それから、東京空襲を体験したいろいろな文化関係者のところへ毎日のように出向いて、呼びかけ人になってもらうことにしました。

2ページ以降につづく

発行 「東京都平和祈念館（仮称）」建設をすすめる会
〒102-0084 東京都千代田区二番町12-1 エデュカス東京
東京総合教育センター気付 FAX 03-5927-1487

（注）
この文は今年8月13日、台東区民会館で、全国空襲被害者連絡協議会が開催した「舞台は国会へ 8・13集会で早乙女勝元さんがおこなった「おはなし」を起こし補筆されたものです。

私はとくにシメキリはなかったし30代だったので、それが容易だったんですね。そしてさらに、今回の大資料集は、東京都民の立場に立った記録集でなければだめだ、ということで、東京都民の体験記



を全5巻のうち1・2巻に載せる構成にしました。

次に体験記が集まりやす

いようなハンディでわかりやすい1冊を先に出したらどうだ、と松浦さんがおっしゃるものですから、岩波書店にいて、こういう試みでいかなものでしょうか、と言いました。私は大学も高校も出ておりません。そのことを岩波書店がご存じかどうかかわかりませんが、編集者は親切にきいてくれました。そして、「それならば、まず原稿を持っていらっしやい。ただし、1か月間しか猶予がありませんよ」というわけで、原稿執筆を引き受けて帰りました。

それから、いろんな方々のところをまわって、いよいよ東京都へ出向くことになりました。それが8月5日です。ですから、家永先生との出会いから1か月間で記録する会の準備を終えたこととなります。

こうして、東京都庁の都知事室で、当時の美濃部都知事に会うことができました。私たちの代表は作家の有馬頼義氏です。松浦さんはそんなに簡単に行かないよ、とおっしゃるし、私もたぶんだめだろう、だめでもともと、と行って行ったわけですが、知事は陳情書を読んですぐ快諾してくれました。「けっこうです。10万人からの死者が出た東京空襲の、その記録集をまとめるということは、東京都にふさわしい仕事です。一体いくらくらいかかりますか？」いくらくらいと問われても、お金のことはまったくわかりません。そうしたら、呼びかけ人て隣席の加太こうじさんが歯に衣を着せぬといった調子で、「美濃部さん、まあ、1億円がとこでしょうね」と答えました。ラーメンが30円の時代で、私はぎよとなったのですが、知事はそれほど驚いた顔をしま

せんでした。加太案は通りませんでした、それに近い金額を東京都が出してくれることになりました。あの時ほど革新都政でよかったと思ったことはありません。

ところが、なんとこちらのほうにバトンが移ってきたのです。東京都のどこかの部署が引き受けてくれると思っていたら、あなたたちが主体となっておやりなさい、東京都はそれをバックアップするから、と都知事が言ってくださり、それからいよいよ「東京空襲を記録する会」が新宿に事務所を設けてスタートします。東京都の予算を個人でもらうことはできないので、代表の有馬頼義氏が主になって財団法人をつくり上げて、10人近いスタッフが必要となりました。

こうして、およそ3年がかりで、『東京大空襲・戦災誌』全5巻を刊行することができました。内外の評価は高く、菊池寛賞などになり、10万人もの犠牲が教科書にも出るようになりました。これが1番目の話で、「東京空襲を記録する会」結成に至る大ざっぱな経緯です。

2. 今も心に残る二人の女性のこと

この間に、いろいろな方々の空襲体験記を直接にうかがいながら、岩波新書の原稿にまとめあげました。私も12歳で東京大空襲に遭い、今も当時も下町に住んでおりますから、そんなに交通費をかけなくても、近場に体験者はたくさんいらっしやいます。その中でお二人ばかり、今もずっと心に残り続ける女性のことをお話したいと思います。

〈橋本代志子さんの話〉

まず1番目の女性、橋本代志子さんで、戦災当時、24歳、本所区亀沢町にいて1児の母親です。この方はすごい記憶力で、体験を昨夜のことのよう鮮明に話してくださいました。その中でとくに驚いたのは、1歳の赤ちゃんを背中にしょって、家族一同とどんどん逃げて、堅川の上の三の橋に到着したときのことで、

両岸からバーナーのような火が押し寄せてきて、背中の赤ちゃんが異様な声で「ぎゃー」と泣いたといひます。おびい紐をほどき、背中の赤ちゃんを抱

いて、よくよく顔を見たところ、口の中が真っ赤か。血ではありませんよ。火の粉が赤ちゃんの口の中でちりちりと燃えているのを、指で抉り出しながら逃げたといいます。小さな赤ん坊の口の中の、その喉をふさいでいる火の粉など想像できるでしょうか。小説家でも想像がつかないほどの体験でして、その話がずっと心に残っています。



〈森川寿美子さんの話〉

次は本所区東駒形町に住んでいた森川寿美子さん。やはり24歳の母親です。3人の幼子を抱えていらっしゃいました。1番上の4歳の男の子は「輝一」くん。その下に、生まれて8か月の双子の女の赤ちゃんがいました。ご主人は軍隊でおりません。彼女は、火がどんと我が家に迫ってきたときに、3人の子どもたちをどうやって単身で救い出すかということ懸念に考えた結果、1本のおぶい紐で瞬間的に双子の赤ちゃんを背負うことを考えました。その訓練を毎日のようにやっていたといいます。当時の若い母親はそんなことまでしなければならなかったんですね。

今みたいな子どもを前に抱くおぶい紐ではありません。単なる1本のタスキみたいなものです。それで、生まれたばかりの赤ちゃんを背負うことさえ、現在の若い母親はまず困難かと思えます。というのは、私もまた共働きでして、子育てではいささか苦労をしました。こちらは決まった収入がないのでしようがないんです。カミさんがせっせと働くことで、子育てのかなりの重荷を背負ってきました。生まれた赤ん坊を母乳で育てようということになり、彼女の勤務先まで赤ん坊を背負っていくのは私です。ラッ

シュの電車に乗って、揺られて、当時の高砂駅から曳船駅へ。さらに勤め先の小学校の用務員室に行くわけです。

ところが、その赤ん坊をうまく背負うことができません。ぐにゃぐにゃの赤ん坊です。どういうふうにして背負ったかということ、テーブルの上におぶい紐をスルメイカみたいに広げ、その上に赤ん坊を仰向けにのせるわけです。そして、私はどうするかというと、フィギュアスケートの荒川静香選手のイナバウアーのように体を反らせて（笑い）、ようやくのことでできました。ひとりの赤ちゃんさえ、そうなんです。それが2人を同時に背負うなんてことができるのでしょうか。それができたんだといいます。誰も助けに来てくれるはずはないと毎日、毎日訓練していましたから、というお話です。

ところが、いざ火が我が家に燃え移ってくると、あんなに訓練してきたのに、手が震えてどうやってもうまくいかない。やむをえず、一人を背中に、もう一人は片手に抱いて、さらに4歳の男の子の手を引いて、哺乳瓶その他は風呂包みにして首からさげて家を出ました。両手がふさがっていますから危ないものがすっ飛んできて避けることができません。

誰か助っ人が来てくれればいいけれど、それは望むべくもない。生きるか死ぬかが紙一重の緊迫した非常時です。

避難した先は横川国民学校。今も東京スカイツリーからバスで2つ目か3つ目にあります。私も何度かその場所を確認に行きましたが、横川国民学校は3階建てなんです。それが一瞬のうちに巨大な火の塊りになって、火の粉なんていうものではないんですね。物干し台であったり、雨戸や屋根瓦であったり、真っ赤に焼けたトタンであったりがピュンピュン飛んでくる。火焰地獄の猛突風の中で、彼女はたまたまお隣の奥様とばったり会って、双子の赤ちゃんを背中に背負わせてもらいました。そうすると、片手が空くわけです。もう一方の手は4歳の男の子の手を握りしめている。その手を離せば、一瞬のうちに子どもはすっ飛んでいってしまうかもしれない。そういう状態のまま運動場の片隅にまで追い詰められていきました。

人々はみな運動場の脇のプールへ。氷が張っていましたが、その氷を割って、次々と入っていきます。

プールはもう満杯の銭湯のようになってしまう。どんどん水を汲み出しては体にかけているので、プールの水位もみるみる下がっていくわけです。ぐずぐずしていれば、彼女一家の入る余地がなくなります。思い切って、水中に入りました。水温はものすごく低かったのではないかと思います。降りかかる火の粉を払いながら、輝一くんを抱きしめているのですが、輝一くんは赤ちゃんのことをとても心配して、「赤ちゃん大丈夫かな、お父ちゃんのところへ行きたいよ」と、繰り返しながら、だんだんとかすれ声になっていく。そして、彼女自身もふうっと気が遠くなってくる。火攻め水攻めの数時間が経過して、ようやく火の手がおさまる時を迎えました。そのあとは、森川さん自身が書いた記録の一部分をご紹介します。

「やっとプールから這い出た。濡れた身に吹きつける北風は、輝一の体を硬くしていきます。私は寸時も遅れてはいられない。でもどうしたらいいのだろう。狂いそうになる心をふりきって、背中の人を下ろしました。小さな手は母の肩につかまって、なかなか離れない。家を出るとき着せた菊の花模様の着物の胸に住所、姓名の名札までつけて、いつもおとなしく眠っているときのように二人並んで死んでいる。私は二人の上に覆いかぶさって泣きました。ごめんなさい、ごめんなさい。私はただこれしか言えないのです。輝一はますます唇を固くかみしめていく……。」

小さな二人はもうすでに手のつけようがないのだ、今はなんとしても輝一を助けなければ、ということで、プールの縁に、二人の赤ちゃんを並べて、その上にねんねこばんてんをかけてやり、息も絶え絶えの輝一くんを抱いて、彼女はとにかく救護所へと走ります。救護所へ行けば医者がある、と誰かが教えてくれたからです。吾妻橋のたもとのピール会社が救護所でした。そこにたどり着いたけれど、医者なんかおりません。薬もありません。そして、1軒の焼け残った家にたどり着き、お茶をもらいました。

お茶を口に含んで、口移しで輝一くんに飲ませたところ、「おかあちゃん」と一言だけで、輝一くんは息を引き取ります。彼女は自分の体のぬくもりの

中で、3人の幼子を失ったのです。

そして、5月の空襲では、こんどは両親を失いました。そういう身でありながら、彼女の記録は実に克明に書けていて、涙なしには読めません。私は家が近かったものですから、お宅まで出かけて行って、記録でちょっと落ちているところを質問して補いました。

一つは、練習すれば、二人の赤ちゃんを同時に背負うことができるものなんでしょうか？

「できます。生きるか死ぬかという状況下でも、必死に訓練すれば……」とのこと。それが、いざとなったら手が震えてできなかったそうです。

二つめは、プールの水の中で双子の赤ちゃんが亡くなるのですが、死んだことがどうしてわかりましたか？ 背中に背負っているんですから顔を見ることはできませんよね、と尋ねましたら、「水中で小さな4本の足が、強く腰を蹴った」そうです。次に体重がぐうんと増したといいます。私は眠ったように死んだかと思っていましたが、瀕死の赤ちゃんでも、もがいて苦しんで、不条理な死は容易に受け入れられなかったにちがいない、私はその言葉に打ちのめされる思いがしました。話すほうもつらかったと思いますが、聞くほうもつらいですよ。そして、誰にも話さなかったそういう残酷な話を、私はいの一番に聞き出したのです。

そうすると、聞いた話をこれからどう生かしていくのかという責任を伴うではありませんか。私の筆力では、なかなか大勢の人の関心を引くまでには及びませんが、懸命になって書けば、なんとかかんとか真実の文章になるのかもしれない。もう上手い下手の問題ではありません。夜昼休みなしに書き続け、約束の約1か月間で、300枚の原稿を持って岩波書店に行きましたら、これでOKとなりました。驚きました。1週間でゲラが出てきました。1970年の8月に「記録する会」が誕生し、翌年の1月20日には岩波新書『東京大空襲』が、少し間をおいて2冊目の『東京が燃えた日』が出ております。それは私にとって夢みたいな話で、あまり売れた本なんか書いたことがありませんので、なんだか自分の本でないような気がしました。

森川さんは85歳で亡くなられましたが、亡くなっ

た後、手づくりの歌集が送られてきました。彼女は歌人だったんです。私は歌については素人ですけど、とてもわかりやすい歌ですので、何首かご紹介します。

わが胸の苦しき涙誰か知る も一度かえれ
母のこの手に
地獄の夜幼きながら耐えし子の けなげさ
思い涙垂りくる
差しのべるわが手払いて幼子は 消えて
醒めれば夢に泣きたり
繰り返しわれ叫びたし ふたたびを



おかしてはならじ
戦争の愚を

手造りの歌集を残して、森川寿美子さんはこの世を去りました。85歳で亡くなったと申し上げましたが、今の私はその半年下です。今にして彼女の気持ちが痛いようにわかります。その森川さんにもう一言聞いたことが、きょうの会の主旨につながるかと思います。3人の幼い子を失って、両親も失って、自治体あるいは国から何かもらいましたか？ 「もらいましたよ、カンパン1袋を」それはどこでもらいましたか？ 「ビール会社の救護所で」。お医者さんも薬もなかったけれど、カンパン1袋だけはもらいました、と。

カンパン1袋でいいんでしょうか。軍人・軍属にはこれまでになんと55兆円もの恩給費が投入されたというのに。この国は国民主権の国ではなかったですか。主権者たる森川さんに対して、国はカンパン1袋だけですませたのか。私はそのことを深く胸に刻みこみました。

3. 戦争、空襲を繰り返させないために

戦争が終わって、ようやく生き延びた私は独学でいろいろなことを知ることができました。兄が学校の教員で元軍人でしたが、なんとか生き残って帰り、私にあれこれと教えてくれたからです。忘れられな

いのは昭和21年11月の新憲法の公布です。20代の兄は、今度の憲法で一番心に残ったのは、「やっぱり第九条だ」と言います。お前も読んでみたらよい、いいことが書いてあるぞ。生き残ってもうけものだった、ということが痛切にわかるからな、と。日の丸の小旗に送られ、わが家をあとにした彼は、当然死を覚悟していたでしょうね。私は10万人も死んだ炎の夜をなんとか生き延びた人間です。学校はまる焼けになって、小学校は63人もいた男ばかりのクラスですが、去年のクラス会で集まったのはたったの4人しかいません。その他の消息はまったく不明です。

私は兄に誘われて、憲法を読むことは読みましたが、読み流していました。後に大事なところを読み違えていたことに気がつきました。どこを読み違えていたのか。憲法前文の次の1節です。

「政府の行為によって、戦争の惨禍が再び起こることのないようにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する」。

政府の行為によって、と書いてあるではありませんか。政府の行為によって生じた戦争の惨禍なんです。私が経験した東京大空襲は戦争の一部でしかありませんが、それは国民の行為ではなく、政府の行為によって始まりました。戦争を始めてよいかどうかと問われた国民は一人もおりません。戦争を始めたのが政府ならば、その責任をとるのも政府のはずです。ということ憲法はその前文で裏書きしているように思われます。もし、この国が戦争へ向かっていくとするならば、それもまた政府の行為と受け取っていいと思います。そういう惨禍を前にして、「これはおかしい」、「これは違う」、といい続けるのが主権者の役割です。そう言い続けることによって、戦争への道にブレーキをかけるべき権利と使命と義務が主権者にはあるんだということが、憲法を読み返すうちに、だんだんとわかってきました。

しかし、それとあわせて、もう一つ皆さんにご報告しなければならないのは、国はこの東京大空襲の惨禍をどのように報じたのか、ということです。3月10日の正午、焼け残りの家のラジオは大本営発表と称する政府筋の東京大空襲に関する声明を発表しています。その中に1行、私がどうしても承服し

かねる文章があります。「都内各所に火災を生じたるも、宮内省主馬寮は2時35分、その他は8時頃までに鎮火せり」。つまり、いの一に東京都内で火を消し止めたのは、宮内省の主の馬の寮、主(しゅ)馬(め)寮だという。これがどういう役割を果たしている寮かは、説明を要しませんよね。そこは空襲警報解除2分前に消しとめました。そして、100万人からの罹災者と10万人からの東京都民の命は「その他」の3文字で片づけられたのです。

当時の国民は臣民とか、赤子、あるいは民草(たみぐさ)といわれ、要するに雑草並みの命でしかったということ。いくらでもスベアはあるぞといわんばかりです。東京空襲を記録する会は、そういう事実もさまざまな資料でひもときながら、アメリカまで特派員を送って、国立公文書館にあるさまざまな重大資料を入手してまいりました。そして、池袋駅と渋谷駅に立って、空襲の体験記を寄せてくださいと呼びかけました。

3月10日の下町の体験記は容易に集まりました。10万人も亡くなったんですから、思いを残している人がたくさんいたんですね。しかしそれだけでなく、山の手空襲、そして5月の空襲の分もいれないと東京空襲全般の資料とは言えません。ですから駅頭に立って、体験記を寄せてくださいというビラまきまでして、1万2000枚からの体験記が事務局に集中しました。この記録に対する会の方針は全員採用です。どなたでも投稿してくれた方は全部のせます。そして、原文忠実です。長文は一部カット、間違ったところは直しますが、原文を尊重する方針を貫きました。東京都民のための大資料集を世に残そうということで、3年間にわたり、会のメンバーがフル回転して完成させることができました。

今にして思いますと、この事業は革新都政だからできたのではないかと、いう気がします。私たちは、美濃部都政以降も東京都に要請行動を何度も行いましたが、知事に会うことさえもできません。美濃部さん後の都知事選は有力候補3人で、私どもの東京空襲資料館建設の公開要請書には3人ともOKでした。最も熱心な返事は鈴木俊一氏でしたが、知事室に行っても、秘書に簡単に断られてしまいます。それでも何回か繰り返すうちに、新たにできる江戸東京博物館の中に、あなた方の趣旨を盛り込む、とい

うような答弁が鈴木知事からありました。

本当に盛り込まれたのでしょうか。江戸東京博物館へ行った方は、東京空襲に関する展示をご覧になってください。あの広大なミュージアムの40分の1程度、ほんの一部のワンコーナーでしかありません。それでも趣旨を盛り込んだといえるのでしょうか。私にはとうてい納得できませんでしたが、それが都政の現実なのかと思います。

そういう不条理を重ねて、いよいよ空襲被害者援護法の制定は大きな山場にさしかかってきました。もう時間はありません。原告団の皆さんはほぼ私と同年齢、もう少し上の方もいます。私もあと半年で85歳になります。年下の永六輔さんも、大橋巨泉さんも私たちの会に協力してくれて、そして、あの世に行ってしまいました。今日の会の皆さんも高齢ですから、ここ数か月が山場なんですね。

私は「声」を「声」につないでいくところ、必ずや原告団、あるいは被害者の思いが通るものと考えています。なぜかという、私たちはこの国の主権者だからです。主権者を蔑ろにして民主主義の国と言えますか。「それはおかしい」、「それは違う」と言いつづけていくことが私たちにできる唯一の方法ではないでしょうか。その声に道理と感動が伴えば、必ず1+1が、2から3から5、20以上になるのだと思います。

私の一声はあまりにも小さな声だったけれど、それでもその一声が全国に広がって、全国規模で空襲を記録する会が誕生して、今も諸都市にあります。そして、空襲・戦災を記録する会全国連絡会議が毎年夏場に開かれています。今年も仙台で開かれます。

46回目ですよ。ということを考えていきますと、1なる声に共鳴する人たちは決して少数派ではない。ただし、その声に真実と感動が、ということをつけ加えておきたいと思います。

時間になりましたので、最後に次の言葉を申し上げて、話を終わりたいと思います。「あせらず、ひるまず、あきらめず」。今朝、何を話そうかと考えているときに、ふとこの結論が頭の中に浮かびました。もう一度言います。「あせらず、ひるまず、あきらめず」に民間人の戦禍の継承を次世代に、戦争・空襲を絶対にくり返させないために。ご清聴ありがとうございました。

《講師紹介》

早乙女勝元

（さおとめ かつもと）
1932年東京都足立区の生まれ
江東区北砂にある国立民営の東京大空襲・戦災資料センター館長
著書＝『猫は生きている』『パパママバイバイ』（1997年横浜米軍機墜落事件を題材にした絵本）『東京空襲下の生活日録「銃後」が戦場化した10ヶ月』『東京が燃えた日』『もしも君に会わなかったら』
新刊に青風舎（0120・4120・47）より『わが母の歴史』社会の底辺を生き抜いた母の生き方を通して照射される戦争と平和。増刷新刊に『写真版東京大空襲の記録』『蛍の唄（旧題・戦争と青春）』（新潮文庫）『図説東京大空襲』（河出書房新社）『東京大空襲』（岩波新書）ほか。

《参考》

（東京大空襲・戦災資料センター）資料より抜粋—いのちと平和のバトンを、未来にきちんと受け渡すために—館長 早乙女勝元
1945年3月10日の未明、約300機のアメリカ重爆撃機B29による東京下町地区を目標にした無差別爆撃で人口過密地帯は火災地獄と化し、罹災者は100万人を越えて推定10万人もの命が奪われました。3月10日を含め、東京は100回以上もの空襲を受けて、市街地の5割を焼失したのです。
「東京空襲を記録する会」は1970年より、この空襲・戦災の文献や物品を広く収集してきましたが、1999年に東京都の「平和祈念館」建設計画が凍結となりました。そこで「記録する会」と財団法人政治経済研究所は、やむにやまれぬ思いで民間募金

を呼びかけ、4000名をこえる方々の協力によって2002年3月9日、戦禍の最も大きかった地に当センターを完成させることができました。用地は一篤志家から無償提供されたものです。

2007年3月には、多くの皆さんの熱いご支援により、さらに増築を実現し、展示を充実させて、修学旅行生など若い世代の学びの場としての環境が整いました。（以下略）

住所

江東区北砂1丁目5-4
電話

03・5857・5631

開館要綱

開館日時 水曜日～日曜日

12時～午後4時

休館日 月曜日・火曜日

年末年始、3月9日・10日

は曜日にかかわらず開館

協力費

一般 300円、

中・高校生 200円

故 永六輔さんを偲んで

生前、永六輔さんはラジオパーソナリティ、タレント、随筆家、放送作家、作詞家などと多彩な活動をしてきました。

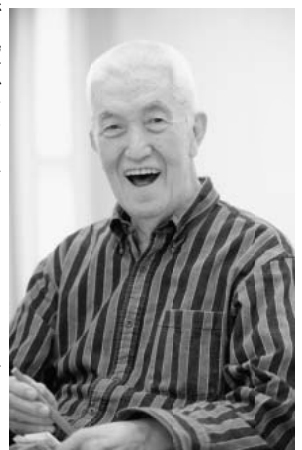
同時に庶民の立場にたってアメリカのベトナム侵略戦争反対や憲法改悪に反対する発言も積極的におこなうなど、平和運動にたえず激励を送ってきてくれました。

1976年春の都知事選挙にあたっては、北杜夫、沢村貞子、杉村春子、高木東六、林家正蔵、堀田善衛、吉村昭、吉行淳之介、松浦総三、一色次郎、早乙女勝元氏等とともに都知事候補への「空襲・戦災資料館」（仮名）を、東京に設置することでの公開質問書

を発表に参加しました。また、2004年12月10日に開かれた「東京都平和祈念館（仮称）」建設をすすめる会の4周年のつどいにも参加して、「敗戦60年を前にして・伝えていかなければならないこと」と題して語りをしてくれました。

永さんはこの語りの中で、戦争を語り継ぐ取り組みを小沢昭一・野坂昭如・そして三波春夫としてきたこと、その体験を通じて平和運動が日常から外れていることを指摘し、つらく重いことをつらく重く話すだけではなく、おもしろく話ことによって深く伝わるようにしていくことも大事であると語り、「平和祈念館」をつくることも多くの方が手伝いをしたがついて

いるはずなど示唆に富んだお話をされたのを思い出します。永さんはその翌日のラジオ番組で、このつど



いの様子を紹介していました。

永さんは平和について熱い情熱をもって人々に訴え続けてきた人でした。

心からご冥福をお祈りします。

（世話人・柴田桂馬）

「東京都平和祈念館（仮称）」建設の早期実現を！ 小池百合子都知事に要望

「東京都平和祈念館（仮称）」建設をすすめる会の代表は、9月20日（火）午前、東京都知事室と都生活文化局を訪ね、「東京都平和祈念館（仮称）」建設の早期実現を要望しました。

都知事室は知事秘書の大野貴史担当課長、生活文化局は渡辺陽子企画調整課統括課長代理と浅香周子文化事業課課長代理が対応しました。

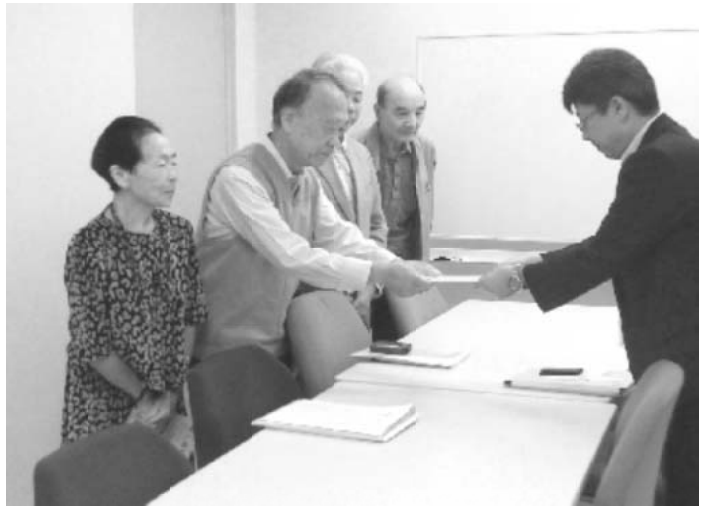
会からは歴史教育者協議会の石山久男、東京原水協の柴田桂馬代表理事、東京都歴史教育者協議会の佐々木富雄、平和遺族会の島田初代、東京空襲犠牲者遺族会の大竹正春の6氏が参加しましたが、知事室では大野課長にたいして、都知事宛要請書（8頁に掲載）を手渡すともに、「東京が平和な国際都市であることの証としての“平和祈念館”を建設して、2020年のオリンピック・パラリンピックを平和と友好の祭典とするよう期待している」「そのためにも都

知事または副知事が同会の代表世話人や著名な有識者、東京空襲遺族会の代表に直接話を聞く機会をつくることも検討してほしい」と要請しました。

これに対して同課長は要望書を受け取り、趣旨は都知事と担当局の生活文化局に伝えますと答えました。

石原都政以降一度も開けなかった企画検討委員会見直し中

会の代表は都知事室への要請にひきつづき生活文化局にいき中嶋正宏局長あての要請書（9頁に掲載）を担当課長代理に手渡しました。



【写真】左から島田初代、石山久男、佐々木富雄、大竹正春の各氏、右は要請を受け取る大野貴史課長

ここでは、会の代表から「石原都政にはじまり、猪瀬・舛添都政と16年の間、毎年東京都が開催してきた平和の日行事に関して検討すべき企画検討委員会は一度も開催されてこなかったこと」が指摘され、改善を求めたところ、担当課長から「これらについては現在見直しを検討しているところ」と回答しました。

東京都知事 小池 百合子 殿

「東京都平和祈念館（仮称）」建設の早期実現を求める要望書

このたび新たに東京都知事の重責を担われ、日々都政のためにご尽力されておられますことに敬意を表します。

この機会に、長年東京都政の懸案となっております「東京都平和祈念館（仮称）」建設につ

いて、これまでの経過をふまえて、要望をさせていただいたく存じます。ご多忙のところとは存じますが、ぜひともご高配をよろしくお願い申し上げます。

すでにご承知のことと存じますが、東京は、かつての戦争の中で、1942年4月18日に初空襲を受けてから1945年8月15日までの間に100回以上の空襲を受けました。そのなかで最も甚大な被害をこうむっ

たのは1945年3月10日未明のいわゆる東京大空襲であり、約2時間半の間に下町一帯が1665トンもの焼夷弾などの投下を受け、100万人が罹災、死者推定10万人、負傷者4万人以上という惨澹たる状況となりました。また都下の硫黄島では1945年2月から3月にかけて日米両軍の間で戦闘が交わされ、2万余人の日本軍兵士と6800人余りの米軍兵士が戦

死するという悲惨な状況が生じました。硫黄島では日本軍兵士1万2000人の遺骨がまだに収集されない状況にもなっています。

このような戦争の惨禍を繰り返さないために、戦争の事実を語り伝える平和記念館がほしいとの声が都民の中からおこりました。とりわけ空襲被害者やその遺族の方々からの願いも強く、こうした要望に応じて東京都は、1990年に3月10日を「東京都平和の日」とする条例を施行、1992年には「東京都平和記念館基本構想懇談会」を発足させることになりました。

この「基本構想懇談会」は、平和記念館の基本的な性格や、事業内容、施設についての構想も含めた「報告」を、1993年6月に当時の鈴木俊一都知事に提出しました。基本的な性格としては次の4点があげられています。①東京空襲の犠牲者を悼み、都民の戦争体験を継承すること。②平和を学び考えること。③21世紀にむけた東京の平和のシンボルとすること。④平和に関する情報のセンターとすること。

そして、1995年3月10日には、「平和は、何ものにもまさってすべての基礎をなす条件です。日本国憲法が基本理念とする恒久平和は、私たちすべての願いであり、人類共通の目標です。私たちは、軍縮と核兵器の廃絶を機会あるごとに強く訴え、戦争の惨禍を再び繰り返さないことを誓います」との「東京都民平和アピール」を発表しました。

これらは、東京都当局をはじめ、都議会各会派の代表、有識者も参加、賛同し決定されたものです。

これらを受けて東京都は「東京都平和祈念館（仮称）基本計画」を発表し、さらに建設委員会を設置して建設計画を具体化し、1998年2月には建設予算案を都議会に提出するまでにいたしました。ところがそのさい、都議会の一部から建設計画の見直しを求める意見が出たため、あらためて都議会の合意を得て建設するとの付帯決議が可決されました。

本来ならば、ただちに合意をつくるための協議を都議会と行政当局の間で進めるべきところだと思いますが、その後そのような協議が行われることなく、そのため「平和祈念館（仮称）」建設は凍結状態となったまま18年が経過するにいたっております。

その間、平和祈念館建設のために、広く都民に戦時資料の提供がよびかけられ、その結果、5千点以上の貴重な資料が都民から提供されていますが、これらほとんど活用されないまま死蔵されている状態になっています。

このような理にあわない状況を打開して、「東京都平和祈念館（仮称）」建設に向けて動きだすことが都民の願いに応えるゆえんではないかと私どもは考えるしだいです。

都知事におかれては、以上に述べました点について真摯にご検討いただき、都民の願いに応える解決方向を打ち出されるよう、

切に要望するしだいです。

2016年9月20日
「東京都平和祈念館（仮称）」建設をすすめる会
代表世話人 金子 勝（立正大学名誉教授）
児玉 洋介（東京総合教育センター長）
小森 香子（詩人）
中山 武敏（弁護士）
本尾 良（非核・平和活動家）

中嶋正宏生活文化局長宛要望 (前文は略・要望事項)

- 1、東京都は、「東京都平和祈念館（仮称）」を「東京都平和記念館基本構想懇談会」の都知事への報告（1993年6月）、「東京都民平和アピール」にたって一日も早く建設してください。
- 2、東京都主催の「東京都平和の日」の記念式典は、都民の誰もが参加できる会場で開催してください。
- 3、「東京都平和の日」記念行事の予算を増額し、内容を拡充してください。とりわけ空襲体験者の訴えの時間の拡充、資料展での空襲体験者のビデオ上映コーナーの拡充、1995年の記念行事で発表した「都民平和アピール」を普及してください。
- 4、「東京都平和祈念館（仮称）」を建設するとして収集した資料の公開、民間への貸出を実現すること。
- 5、東京都が収集・保管している戦時資料を「東京都平和の日」条例と「都民平和アピール」の立場に立って3月と8月に都庁展望室で東京空襲・平和展を開催すること。

都内各地の夏の平和展

足立区



ひき、恒例の企画になっている。参観者が飛び入りで参加できる

「即席川柳コーナー」も目をひくものがあった。

イベント部門では、2日目の「講演とうたごえの集い」は、雷と豪雨の悪天候に襲われ参加者が少なく、ショックを受けたが、1日目の「映画の集い」と3日目の「証言の集い」は、会場いっぱいの参加者だった。

「映画の集い」では『猫は生きている』と『戦争と青春』を上映し、地元に住む原作者の早乙女勝元さんが来場され、あいさつをされた。

足立平和展は、当日の参加者によるカンパが財政の支えになっているが、十分ではない。宣伝のピラも一定程度しかまけていない。実行委員も高齢者ばかりで、若い人を増やしたい。

第30回足立平和展に向けて検討していきたい。第30回展は、来年

4月から実行委員会の準備を始める。それまでの半年間は「足立ゼミナール」という学習会をやることになっている。この「平和ゼミナール」を続けて行なうなかで新しい若い仲間を実行委員に増やしていき、足立平

和展の展望を質量ともにさらに充実したものにしていきたいと思っている。

◇惨状の写真を見て改めて戦争の恐ろしさを知ることができました。

◇足立区の千住戦跡を知ることができてよかったです。

◇戦争する国と戦時体制の強化の展示がよかった。

◇「猫は生きている」過酷な戦況・空襲の中でたくましく生きる親子の姿に感動しました。戦争はしてはならないこと肝に銘じるべきなり。

◇「猫は生きている」戦後の生まれで経験はないのですが空襲を受けた親族の話を思い出し、実際はもっともっと大変だったと感じました。「誰もが戦争にさせないための努力をする」心にとめておこうと思います。

(実行委員長 狐塚健一)

江戸川区



第16回「平和のための戦争展 in 江戸川」

第16回を迎えた「戦争展」は、8月27日(土)、28日(日)、タワーホール船堀の展示ホールで開催。700人を超す参観者で盛況のうちに終わり

第29回足立平和のための戦争展(足立平和展)は着実な一歩前進♥

この8月19日から21日に行われた足立平和展は、29回目を迎えた。

展示部門では、一段と前進が見られた。

メイン展示(Lソフィア1階画廊)は、①「学び舎」の中学歴史教科書に描かれた日中戦争・アジア太平洋戦争、②中国への日本軍侵略を平頂山事件の写真パネルに見る、③足立の空襲と東京各地の「原爆の火」、④安保法制=戦争法の問題、⑤今、沖縄は一辺野古と高江、の5テーマでおこなった。

会場は狭いが、展示内容がよく整理され、まとめられていて見やすくなった。展示物をつくった実行委員の努力が光った。また別会場(3階壁面)の市民手づくり作品公募の「平和美術文芸コーナー」では、絵手紙、絵画、俳句などが、一定集まり、通りがかりの人たちにも関心を

ました。

被爆者の会、沖縄戦、日中戦争、日本会議の実態などの展示には、大勢の人が集まり熱心に学習していました。

平和の短歌・絵手紙・パッチワーク等にも称賛の声がしきりでした。戦争当時の物品の展示ではじっくりと手に取りながらの鑑賞が印象的でした。

平和の朗読、歌に対しても「状況が目浮かぶようでとても感動的でした」などの声が寄せられました。

憲法施行70年一9条かがやく日本を」と題しての宮崎礼二氏（明海大学准教授）の講演は大変切れ味鋭く、聴取者から「学べることの多い有意義なお話だった」「もっと大勢の人に聞いてほしかった」などの感想が寄せられました。

例年以上の参観者は、戦争法が強行実施されようとしている中で、平和への関心の高まりの結果だと考えています。

「すごかったです。またもっと知りたいと思いました」「とても楽しかったのでびっくりしました」などの小学生の声も聞かれましたが、もっともっと若い人たちに観てもらおうことが今後の課題です。

（丸 宗一 記）

中央区

平和をねがう中央区民の
戦争展

憲法の危機と沖縄基地
問題にスポット

東京・中央区の「平和をねがう中央区民の戦争展」（平和プ



ラザ2016）が8月27日（土）・28日（日）の2日間、月島社会教育会館で開かれました。

今年は「憲法のこと、沖縄のこと、一緒に考えましょう」と呼びかけ、講演、パネル展示、映像などで問題意識の共有化に努めました。私たちの戦争展の特徴は、加害と被害の二つにしっかりと目を向けていることです。加害は「一日本兵が撮った日中戦争一村瀬守保写真展」が目玉で、南京事件で揚子江河岸に浮かんだおびただしい死体や日本軍直営の慰安所などの写真に衝撃を受けた方が多かったようです。満蒙開拓団に参加された方のお話も感動を与えました。現在85歳のAさんは1941年、10歳の時に家族5人で渡満。27歳の1958年に帰国しましたが、17年間の中国生活を振り返りながら「一人で中国人部落に食糧を求めに行った時、『あんた達は戦争の犠牲者だ』と温かく迎えられ、ご飯を食べさせてくれたことが嬉しかった。今、平和でこそ私たちの未来があることを痛感している」と話しました。

沖縄の米軍基地問題は、「沖縄の問題ではなく、日本全体の

問題である」ことが伝わるように努力しました。この問題がリアルに伝わる展示にするため、私（福田）を含む二人の実行委員が2月に沖縄に行き、普天間基地や辺野古の新基地建設現場などを見てき

ました。講演された沖縄タイムスの記者は「沖縄の主張を沖縄の戦中・戦後の歴史に照らして理解すること。安全保障の負担も、その恩恵も応分ではいけないのか。日本にとって『沖縄とは何なのだろうか』と考え、向き合ってもらいたい」と呼びかけました。

来年は日本国憲法施行70周年と、日中全面戦争（盧溝橋事件）及び南京事件80周年の節目の年。これらを念頭に、もっと若い方に関心を持っていただけるような企画内容にしていくつもりです。

（平和をねがう中央区民の戦争展実行委員会事務局・福田和男）

大田区

第37回大田平和のための
戦争資料展

資料展は8月19日、20日、21日という短い期間でしたが、今年も400人を超える方に見ていただきました。

紙芝居グループの方々が演じられた紙芝居に初めて登場した国策紙芝居が2本ありました。戦後世代にとって初めて見る戦意高揚の内容でした。

1940年発行の紙芝居『フ



大田区

クチャントチョコキン』は横山隆一さんの漫画のキャラクターのフクチャンが、軍事費を工面するための国債を買う話です。2本目の『ガンバレコスズメ』は、出征兵士を神社の鳩に例え、幼い子どもたちを戦争に向かわせるプロバガンダになっています。

この国策紙芝居と紙芝居グループの実話に基づく創作紙芝居『太平洋蛸採り物語』『もう…いやわたしが見た東京大空襲』『お母ちゃん、お母ちゃんむかえにきて』など圧巻でした。

講演は、関千枝子さんの広島での被爆証言、小池仁さんの勤労労働員と空襲の話、植井正さんは、『代用品』に見る戦時下の暮らしについて話されました。

合唱団の平和の歌や個人・朗読の会による語りもありました。

展示部門も内容が充実してきました。大田区内の九条の会の紹介、東京の満蒙開拓団を知る会の研究成果をまとめたパネル。公正な教科書採択を求める大田区民の会の教科書展示、田園調布九条の会の憲法についての展示、大田区被爆者の会は、福島在住の著名な写真家・飛田晋秀さんの作品「福島のすがた」を展示しました。

故・村瀬守保氏の50枚にのぼる戦時下の写真、女性団体の絵手紙作品などが展示されました。

実物展示では多くの区民の方から寄贈された品物が並びます。広島

島の原爆瓦・木銃・軍服・焼夷弾・瀬戸物で作られた代用品・衣料切符・千人針・寄せ書きの書かれた日章旗・紙製のランドセル・防空ずきんをかぶった女の子の人形等々です。

(文責・小山一成)

品川区

しながわ平和のための戦争展

8月11日から14日まで4日間開催。この間の来場者はほぼ400人を超えました。

今回は第33回目。テーマは「戦争する国にさせないために」。

展示の主な柱は、第一には地域、子どもと戦争。学童疎開、「ランドセル地蔵」、城南空襲・小島義一さんの絵画、地域の戦争遺跡ほか、特に今年は満蒙開拓団(武蔵小山)についても取り上げました。

第二は考えよう日本国憲法。今年は憲法施行70年。しかし政府は2016年9月19日、憲法を壊して戦争法を強行採決しました。●日本国憲法制定へのあゆみ、●自民党の改悪案及び緊急事態条項。そしてすでに動いている安保法制として、防

衛費の増大と武器輸出、及び関連産業の動向。学問の軍事研究への動き、自衛隊の動向など。

第三は沖縄問題と福島原発事故から5年。今日直面している課題～辺野古、高江での県民のたたかい。甲状腺ガン多発や原発再稼働について取り上げました。ほかには戦争法、原発に反対する地域の活動。地域の書道グループは、「一本の鉛筆」(松山善三作詞)で反戦の心を訴えました。

「催し」は、上記テーマを深める形で証言や講演を連日行いました。子ども・地域に関しては、「品川ケーブルテレビ」が戦後70年の三部作として制作した品川に関するDVDの上映、子どもたちを対象に「ランドセル地蔵」(古世古和子作)や「おこり地蔵」(山口勇子作)など。

日本国憲法に関しては「日本国憲法の危機と改憲阻止の課題」と題して金子勝さん(立正大学名誉教授)が講演。参議院選挙結果からその危険性を指摘され、星の数ほどの憲法カフェをと強調されました。

武蔵小山満蒙開拓団については、飯白栄助さん(日中友好協会)がその体験を、福島原発被災者の叫びとして伊藤千恵さん(現在東京に避難中)が政府の補助金打ち切りや子どもの甲状腺ガンなどの問題について強く訴えられました。

最終日は沖縄デーとし、全国高校生平和集会in沖縄(2015年12月実施)のDVD、朗読6・23慰霊の日追悼文、沖縄三線、踊りで催しを終わりました。(扇谷道子 記)

渋谷区



渋谷区

第27回「渋谷原爆写真展」～平和のための戦争資料展 被曝・戦後71年 第27回「渋谷原爆写真展」～平和のための戦争資料展～を8月6日（土）～7日（日）に、渋谷・上原社会教育館で開催し、のべ160名の参加がありました。

「写真展・平和の集い」一日目は、午前には、映画「一歩でも二歩でも」午後からは、DVD「あやまれ、つぐなえ、なくせ、原発・放射能汚染～いわき市民と避難民のたたかい～」を上映し、25名が視聴しました。

二日目は、第一部で、江戸川原爆被害者の会会長の奥田豊治さんから、被爆体験を語っていただきました。

奥田さんは、15歳の時、1945年8月6日の広島原爆投下の3日後の9日に、陸軍学校の試験のために広島市に入り、被爆した体験を語られました。71年たった今も、原爆は、被爆者にいろんな障害をおこし苦しめていることを知ってほしいと訴えられました。

第二部では、元日本テレビプロデューサー仲築間卓三さんが記念講演。「オバマ大統領は核兵器をなくす気があるのか」と

いう演題で、5月にオバマ大統領が広島を訪問したときの報道を例に、権力におもねるマスメディアの姿勢を批判。報道に注意するとともに、草の根から個人でも平和の声を発信していく必要性を強調されました。

参加者のうち18人から感想が寄せられました。そのうち、8歳の男の子のものを掲載します。「せんそうのはくりょくがすごくてこわかった。おとが大きかったからこわかった。もうせんそうしないでほしい。」

今年は、例年より親子連れの参加者が多かったように思います。継続は力です。このような写真展を渋谷の他の地域でも実現できるよう努力していきたいと思います。

（「渋谷原爆写真展実行委員会」事務局長 久保壽男記）

杉並区

ピースフォーラムすぎなみ
2016

**未来に向かって手を結ぼう、核も戦争もない世界をめざして
戦争・原爆・平和の展示とイベント**

今年は8月5日、6日に阿佐ヶ谷地域区民センターで開催しました。

テーマは「3・11から5年半」「いま沖縄は」、そして例年のテーマである「平和のために闘った先人たち」「杉並から全世界に発信した原水爆禁止運

動」「核と人間」「今も残る加害—生物化学兵器—毒ガス・劣化ウラン弾」「憲法は日本の宝」など。

展示室5か所と3階のスペース全体の廊下を使って展示。講演と証言は「フクシマの現実～原発の全廃をめざして（広瀬隆さん）、内部被ばくの可視化、軍国主義下の生活（証言—区民）と多彩な企画となりました。加えて杉並区内在住のアジアの友人と対話集会をもち、今年テーマにふさわしい集いが夜8時まで続きました。

紙面の都合で講演—広瀬隆さんのお話（資料とDVDにある）を紹介します。70人定員の会場満席、室温28度、8月の午後の会場で広瀬さんの第一声は、杉並区のがが家の庭もあの時は汚染地点に入り、2011年10月、1万7160ベクレル（m³）、杉並区内の公園では9万2235ベクレル（m³）。さらに水漏れによる海洋汚染、森や林の落ち葉まで汚染。森の動物ももちろん被害（記録が残っている）つまり福島あの事故により、関東も全域が汚染地帯に入っていたということでした。

最近の統計—2016年3月8日—でも福島県内小中学校の8割で土壌汚染、福島の子どものガン172人（2016年6月6日、検査評価部会発表）、私たちの得た（原発後の関東）ニュースからも秩父盆地の落ち葉の汚染（秩父農林高校）、中禅寺湖のわかさぎの被害など広域の被害が記録されています。

講師の広瀬氏は、現在でも水道水は使用せず、特別に入手し

た水を使用中とのことでした。

チェルノブイリ30年、福島5年半の今年、被ばくから子どもを守り、原子力を選ぶべきでない、というまとめに至った集会でした。

(実行委員 前田美那子)

北 区



今年22回目となる「北区平和のための戦争展」が、8月20、21日両日にわたり、北とぴあ・展示ホールを会場に開かれました。

戦争展は、いまから二十有余年前、北区にある自衛隊十条駐屯地の「再編計画」に反対した「自衛隊基地全面解放運動」のさなかに、北区平和委員会の再建とともに誕生したもので、区内の平和民主勢力あげての一大イベントとして、定着してきました。

実行委員会の目標は、分かり

やすい展示、親子で参加し交流ができる場に、若者たちが戦争NO!の継承者となるために、などに置き、開催しました。

参加者からのアンケートでも、「展示が年々洗練されてきたと思います。皆様の努力と熱意を感じます。懐かしい方々との再会も楽しいです」、「掲示物がわかりやすくゆとりがあって見

やすかった。戦争の現実を目にするのはつらいことだが、明るい雰囲気で見ることができた」、「若者のディスカッション。戦争体験をどう語り継ぐか良いヒントをいただいた気がします。若者への信頼を新たにしました。加害の事実を学ぶ事の大切さも」など、その積極性を評価する声が記されていました。

安倍内閣が強行する安保法制の実行を前に、その廃止を求めての運動はいよいよ重大となっていますが、平和を求める世論づくりに少しでも貢献しようと、この間11回に及び実行委を開き、参加者が知恵を絞っての、戦争展となりました。

実行委では、来年23回目の「戦争展」を行うことを確認。さっそく9月8日(木)6時30分～北法律事務所会議室にて「反省会(第一回)」を開くことにしました。

小平市

2016年「平和のための戦争展・小平」を終えて今年度の戦争展(第22回)は9月2日から9月4日まで小平市中央公民館で開催されました。

この戦争展の副タイトルに「戦争のない世界をめざして」と記してある通り、私たちは地球上から戦争をなくしたいのです。そのために1995年から21年間、毎年、過去の戦争の歴史を振り返り、平和の尊さを思い起こそうと展示を行ってきました。

長くつづけている中で、とてもうれしい成果もでてきています。

小平市にある白梅学園大学子ども学部と関係をもつことができ、数年前から、大学の授業の一環として、戦争展見学を行って頂いています。学生さんは自分のおじいさん、おばあさんの年代の実行委員からのお話に真剣に耳をかたむけてくれます。今年も百名以上の学生さんがきてくださいました。

もう一つ特筆すべき特別企画をおこないました。それは9月4日に中央公民館ホールにおいて荒井潤氏が「憲法9条の発案者は幣原喜重郎だった」という講演を行ったことです。

第9条はマッカーサー元帥によって発案され、押し付けられたというのは世界的大誤解であり、1946年1月26日に幣原喜重郎総理が、マッカーサー元帥に発案し、説得した結果生

まれたものであると荒井氏は説明されました。そしてそれを証明する数々の資料を小平市民を始めとする169人の申請者がユネスコ世界記憶遺産に登録申請を行ったことを報告されました。

第9条は、平和を尊ぶ日本人が、日本中と世界中の人々のために、発案したものであることを荒井潤氏は明らかにされたのです。

このメッセージを小平の市民の一人である荒井氏が「小平から世界へ」と発信されたことを私たちは誇りに思い、大いに支援していくつもりです。

実行委員会代表 西村暢夫

東村山市



2016年「核兵器廃絶と平和展」に約2500名が来場

東村山市と核兵器廃絶と平和展実行委員会が主催する2016年「核兵器廃絶と平和展」は、8月22日から8月30日まで、東村山市役所いきいきプラザ1階ロビーで開催され、7日間で2200名の来場者がありました。会場は親子連れが多く訪れ、親が子供に核兵器の恐ろしさ平和の大切さを伝えている姿が特徴的でした。「ヒロシマ・ナガサキの原爆写真展」、市内在住の水彩画家・

市川晴代さんの「戦争体験と戦後の生活」、「平和の絵手紙」などを展示しました。広島市の平和記念資料館からお借りした「被爆現物資料」、熱線で溶けた化粧クリームビンや焼

けた国民衣服を見た来場者から「核兵器の非人道性、平和を伝えていきたい」「市と市民が共催の原爆展は今後も続けてほしい」など多くの感想が寄せられました。26日の「サロンコンサート」に100名、28日には中央公民館ホールで「中学生広島派遣事業による平和学習報告会」と

「平和音楽会」が開かれ223名の来場者がありました。平和学習報告会では、15名の中学生の「核兵器の恐ろしさを知った。被爆者の証言に心を打たれた」「原爆の悲劇を繰り返さないためにも、原爆の実態を伝えて行くことが私たちの使命」と

の報告には会場から大きな拍手が送られました。

被爆者とともに非核・平和を求める市民運動と署名活動が自治体を変え東村山市の非核平和行政を前進させています。。

核兵器廃絶と平和展

実行委員長 儀同政一

あきる野市

「新・原爆と人間展」

あきる野市では、原水協が主催する恒例の「新・原爆と人間



展」を8月22日（月）から26日（金）まで、あきる野市役所コミュニティーホールで開催しました。

この展示は、原水協手持ちの「新・原爆と人間展」とともに、広島市民が描いた「原爆の絵」（30点）を取り寄せて行なっています。

あきる野原水協は、市の教育委員会の社会教育団体として登録されています。この展示会の開催にあたっては、毎回教育委員会に次のような開催要領を提出して、教育委員会の後援を得ています。

『展示目的』

第2次世界大戦は、わたしどもとわたしどもの国土に甚大な惨禍をもたらしました。とくに終戦間際のヒロシマ・ナガサキの原子爆弾による惨禍は、いまだに過去のものではありません。被爆者は、いまなお被爆によるいろいろな障害を背負って生きています。

今年も、被爆71周年の年になり、2016年原水協禁止世界大会は、主として、8月4日から6日にかけて広島で開催されます。わたしどもも、これらの大会に2名以上の代表を派遣することを総会で決定いたしま

した。

このような戦争とは、一体何なのか?を問い直すことは、日常ともすれば忘れがちなわたしどもにとって必要なことであると考えています。戦争とは何であったかを考え、または戦争とはどんなものであるかを知ることにより、戦争への道の社会的な仕組みを明らかにし、平和の尊さを理解してもらうために、この展示会を開催するものであります。

ただ、手持ちの「新・原爆と人間展」のパネルは、毎年同じものなので、これに加えて、広島市民が描いた原爆の絵をお借りして毎年変化をつけています。さらにDVDを視聴するコーナーも設けたり、折り鶴を折ることが出来る場所を確保したりして工夫を凝らしていますが、毎年来場者は減少傾向にあります。今年の場合210人とどまりました。

それでも寄せられた感想文は13件に及び、その殆どがこのような催しの必要性を感じ、継続を求めています。

(あきる野原水協理事長 瀬沼辰正)

豊島区

「平和のための豊島戦争展」を終えて

10月21日(金)、22日(土)に雑司ヶ谷地域文化創造館において「平和のための豊島戦争展」を開催いたしました。来館者は、約300人で、多くの方のご協

力ありがとうございました。

さて、東池袋地域の開発により区民センターの立て直し工事によりこの10年間使用していた展示場が使用できなくなり今回より、雑司ヶ谷地域文化創造館での開催となりました。この会場の認知度が低く来館者が来るのが心配していましたが、従来の半分程度ではありましたが場所的には十分な成果だったと思います。

展示内容は、中国での戦争からの戦争の歴史と城北空襲、原爆展とオハマ来日

そして沖縄と東京の横田基地、自衛隊のスーダン派遣の内容などをおこないました。特に戦争を進める側が必要としている治安維持の実態を展示しました。

来館者からは「安倍内閣と軍事産業が戦争をしたがっている現在、有意義な企画だと思う」

「城北空襲を知らなかった」通りすがりで入りましたが「日本

や世界に目を向け、政治にも関心を持ち続けたいと思います」など多数の感想が寄せられました。

今まで使用してきた展示会場がなくなります。そこには、コスプレ他着替え用トイレを作るなど区民が使用する場所としての開発ではなく一部の人の利益のための開発が行われます。そればかりではなく、公園を利用しての原爆展を計画しました



が、条例外で「使用許可を出すことができません」「今まで使用許可を出していたことが間違いでした」と言われ原爆展は、断念せざるをえませんでした。

(平和のための豊島戦争展実行委員会事務局長 平田 誓)

「東京都平和祈念館(仮称)」 建設をすすめる会への カンパありがとうございます

☆年末カンパ(2015年11月~2016年5月)

146個人7団体

487,000円

☆都政を変える活動・夏季カンパ(2016年7月~9月)

87個人1団体

310,000円

清瀬市

ピース・エンジェルズの発言に感動
『平和祈念フェストin清瀬』の集会から

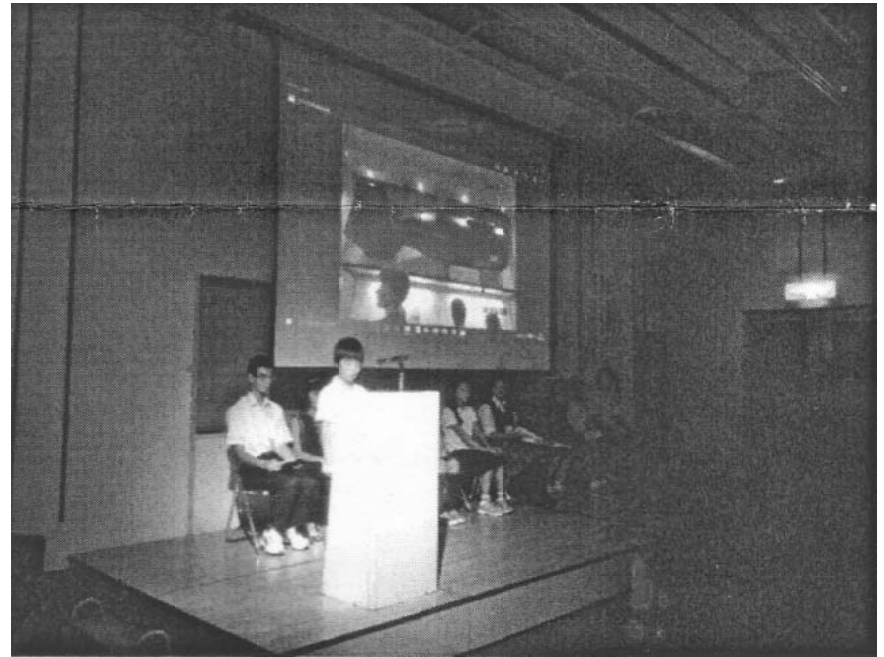
佐々木富雄

8月21日、清瀬市のアミューホールで開かれた平和集会に参加しました。

清瀬市長の挨拶のあと市が被爆地広島にピース・エンジェルズとして派遣した小中学生10名の平和学習報告がありました。子どもたちは被爆71年目となる平和式典への参加、平和記念資料館見学、被爆体験者への訪問など充実した二日間であったことが作文にまとめた報告でわかりました。

以下 文・中略で紹介します。

「式典での子ども代表の『私たちは待っているだけではない。夢と希望に溢れる未来を私たちひとり一人が創るのです』という平和の誓いの言葉に共感しました。」（小）「オバマ大統領の『私たちは戦争の苦しみを経験しました。共に平和を広め核兵器のない世界を追求しましょう』の声明に励まされました」（小）「原爆の子の像（佐々木禎子さんの像）にある『これはぼくらの叫びです。これは私たちの祈りです。世界に平和を築くために』の石碑に刻まれた言葉が心に残りました」（小）
「中学1年のとき被爆された方のお話に涙が出ました。そして一つ目は戦争の事実をしっかり学ぶこと、二つ目は戦時下に生きている自分を想像してみることが大事だと思いました。」（小）
「被爆体験者のお話から原爆の



熱戦と黒い雨について調べました……原爆は大量の人を殺戮する兵器で、このような兵器は絶対に使ってはいけないと思いました」（中）「この広島の悲劇を二度と起こしてはならないし、私たちは受け継がれたことで、その責任を持って伝えたい」（中）「日本人の多くは戦争の体験をしていない。体験者がいなくなった時、私たちが伝え続けなければ平和は崩れます」（中）「世界の人たちが8月6日の現実を目を向けて欲しい」（小）など……

まっすぐな心で被爆地広島を見聞して命の尊さ、平和の大切さを本集会で発表（展示も含め）し“平和の天使”としての責任を果たした子どもたちに心をこめて拍手を送りました。

学習発表後、池上由香さんのアルパの演奏と歌を鑑賞しました。

講演は清瀬市平和祈念展実行委員の定信夫さんが“生まれたときから戦争だった”一子どもの目から見た戦中・戦後のくらし―と題して自分の少年期の体験をまじえて戦時下の学校教育、敗戦直後の生活難の世相など豊富な史資料をスライドで映しながら一時間余り話をされました。内容は紙数の限りで略しますが、満席の参加者からは驚きと共感の声があがりました。子どもたちも熱心に聞き入りました。

私は集会の中で、これまで清瀬市と実行委員会が協働して平和記念事業をすすめて、ピース・エンジェルズの広島派遣もその一環として20年間続いていることを知り、次世代に期待する清瀬市民の平和運動に学ばなければならないと強く思いました。



平和資料館めぐり 18

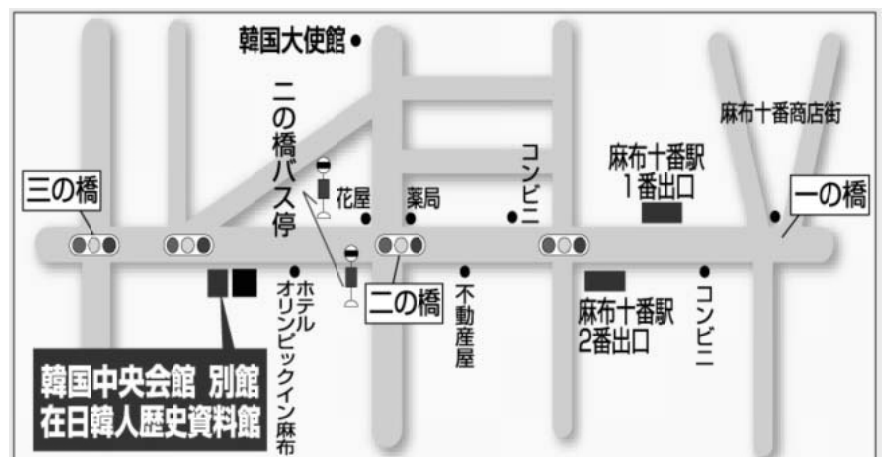
在日コリアンの歴史と向き合う —在日韓人歴史資料館

2005年に開館した在日韓人歴史資料館は、在日の歴史と文化に関する各種資料を幅広く収集して、それらを公開・展示しています。当館が開設された2005年は、日本の朝鮮植民地支配が事実上開始されたとされる第二次日韓協約(乙巳条約)が締結された1905年から百年目にあたる年でした。日本の朝鮮植民地支配は在日コリアンの歴史を語る上で欠かせません。常設展示は植民地期における日本への渡航からはじまり、日本での労働と生活、解放後の権益擁護運動と民族教育、文化・芸術活動まで、差別と暴力のなかでの生活と文化を網羅しています。常設展示は次の三つのテーマに分かれています。

第1展示室：植民地期の歴史

「植民地期における渡航」
 「留学生たちによる独立宣言」
 「関東大震災時の朝鮮人虐殺」

「社会労働運動」「強制連行の実態」
 「皇国臣民化政策」



第2展示室：解放後の歴史

「解放と帰国」「在日のはじまり」「民族教育」「北帰行」「権益擁護運動」「故郷への思い」「活躍する人々」

第3展示室：くらしと文化

「解放前の仕事」「朝鮮人部落」「解放後の仕事とくらし」「冠婚葬祭」

このほか常設展示では、1930年代朝鮮人部落のオンドル部屋や韓国式法事「チェサ」の再現、コッカマ(花輿)の体験コーナーや触れるコーナーを通して、在日のくらしと文化を身近に感じることができます。屋外テラスでは、1930年代大阪にできた朝鮮市場や1950年代のくず鉄商店の再現展示も見学できます。



当館で展示している「もの」のほとんどは寄贈によるものです。植民地期の渡航証明証と協和会手帳、在日のどこの家にもある民族服やアルバムの写真、戦時期の供出を逃れた真鍮の食器、古い教科書や通信簿、生活用具や仕事道具など、押入れや物置の「ガラクタ」に思われる「もの」ですが、それは在日コリアンが歩んできた道のりを語る苦難と誇りに満ちた歴史資料です。

図書・映像資料室には、在日コリアンに関する歴史・文化・民族教育・芸術・文学・個人伝記・自叙伝や日韓関係に関する書籍のほか、雑誌、冊子、ミニコミ誌、論文集など、一万冊以上を収蔵しています。また在日コリアンが描かれた映画やドラマ、記録映像、テレビドキュメンタリなどの映像資料を約七百本以上所蔵しています。なかでも1980年代～90年代にかけて制作された在日に関するテレビドキュメンタリの映像資料は、ほかではなかなか観られないものです。書籍の貸出(会員のみ)や無料上映会を開くなど、図書・映像資料室はだれでも自由に利用することができます。そのほか、毎月第一土曜日に行われて

日韓関係や歴史など、様々なテーマを取り上げています。

在日コリアンはもちろんたくさんの日本の方々に来てもらい日本の中のコリアンを感じて、今まで見えなかったもう一つの社会への橋を渡っていただきたいと思えます。

(学芸員 李美愛)

在日韓人歴史資料館 利用案内

いるのが「土曜セミナー」です。在日コリアンの歴史と文化をはじめ、古代から現在に至るまでの

所在 〒106-8585 東京都港区南麻布1-7-32 韓国中央会館別館3階

電話 03-3457-1088 FAX 03-3454-4926 Mail info@j-koreans.org

開館時間 10時～18時(入館は閉館30分前まで)

入館料 一般200円 学生100円(会員・高校生以下・70才以上は無料)

休館日 日曜日、月曜日、年末年始、5月3日～5日

地下鉄 東京メトロ南北線、都営大江戸線「麻布十番」駅下車、2番出口から徒歩3分

詳細についてはホームページ <http://www.j-koreans.org/> をご覧ください。

都民平和アピールのモニュメント

戦後50年(1995年)3月10日の都主催の平和の日記念式典で採択された「都民平和アピール」(本誌前号37号で紹介)は石原慎太郎都政以降、平和の日行事の中では全く紹介

されてきていませんが、それ以前にモニュメントは、議会棟と立川駅北口に建立されました。そこには「アピール」が銘板に刻まれています。

写真は都議会棟前の都民の広場に向けていまでもかがやいているモニュメントです。



「東京都平和祈念館(仮称)」建設すすめる会
ホームページを開設しました。ぜひご覧ください。
<http://tokyo-peace-m-m.jimdo.com>
Email:tokyo.peace.m.m@gmail.com

「東京都平和祈念館(仮称)」建設をすすめる会 16周年のつどい

12月2日(金)

18時30分開会

会場 豊島区生活産業プラザ
多目的ホール

(会員でない方も、会の主旨に関心があり、賛同される方はぜひご参加ください。皆で考えましょう)

☆第1部 シンポジウム

「戦争法」廃止のたたかいと「平和祈念館(仮称)」建設の意義

司会：石山久男さん
(歴史教育者協議会)

◇テーマとシンポジスト

「東京都平和基本構想懇談会」の回想

池山鉄夫さん
(元懇談会委員・元都議)

新たな戦争の危機—南スーダンの情勢と自衛隊派兵が意味するもの

志葉 玲さん
(ジャーナリスト)

「東京都平和祈念館(仮称)」建設委員会の経過と課題

糀谷陽子さん

(元建設委員・現東京都教職員組合副委員長)

第2部 「東京都平和祈念館(仮称)」建設をすすめる会第17回総会



豊島区東池袋1-20-15
電話03-5992-7011
交通 池袋駅東口から徒歩約10分

(注) 左地図の三越は現在ヤマダ電機LABI日本総本店となっています。また豊島区役所、豊島公会堂は現在解体中です。



主催

「東京都平和祈念館(仮称)」建設をすすめる会

お問合せ先 豊島区南大塚3-48-5 大明ビル4階東京平和委員会

電話03-3927-0237 FAX03-5927-1487